



兵庫県立加古川医療センター
たなか ひろかず
 院長 田中 宏和 さん

無くてはならない病院として

東播磨の急性期総合病院として地域の医療を支えている兵庫県立加古川医療センター。田中宏和院長に当センターの概要や、新型コロナウイルス対応状況などについてお聞きしました。

東播磨医療圏を担う急性期総合病院

昭和11年に兵庫県立加古川懐仁病院として開設、平成21年に神野町に移転し兵庫県立加古川医療センターと改称した当センターは25科353床を有する加古川市・明石市・高砂市・加古郡の人口約72万人の東播磨医療圏を担う急性期総合病院です。

救命救急センターを整備し、東・北播磨圏域で高度処置が必要な重篤患者を受け入れる3次救急医療を提供し、ドクターヘリの基地病院として年間500件以上の救急患者の搬送を行っています。特に多発外傷・重病の熱傷

患者への対応は、この医療圏では当センターのみ対応が可能です。

また、災害時には災害拠点病院として救急医療に携わるよう体制を整えています。

コロナ禍での対応は

当センターは県の政策医療の一つとして、1類および2類感染症に対する医療を担っています。

令和2年から始まった新型コロナウイルス感染症の対応については皆さんもご存じのことと思いますが、実は最初の頃はインフルエンザ程度かなと高を括っていました。感染者の急増と著名人が亡くなるなどの報道もあり、これはただことではないという雰囲気なのか、兵庫県からコロナ拠点病院としての要請を受け、院内での緊張が高まりました。

重症者が亡くなっていくのを見て、恐怖と戦いながら治療を続けるスタッフは、当初言われもない差別を受けながらも、誰一人、弱音を吐くことなく医療を提供し続けました。本当に誇りに思います。

搬送されてくるコロナ患者の多くは介護度の高い高齢者が多く、感染防護をしながら食事・排泄なども含め多くの看護力を必要としたため、コロナ以外の患者に十分な対応ができなくなり一般病棟を閉める必要に迫られました。

コロナ以外の3次救急もことわらざるを得ない状況になったことは痛恨の極みで、コロナがなければ助かった命もあったかもしれません。5月から5類感染症になりましたが、最近の感染者数の増加を見ると今後も対応に追われるのではないかと考えています。

“求められる医療”の提供を

当センターは平成25年に手術支援用ロボット「ダヴィンチ」をいち早く導入し、これまでに847件と県下屈指の多くの手術を行ってきました。昨年には国産ロボット「hinotori」を導入し、より多くの方々への高度な医療の提供が期待できますが、医療を取り巻く環境は厳しいものがあり、病院の統合再編成などで、地域の医療を支えてきた急性期病院の多くが消え去ろうとしています。当センターの医療は県民にとって欠かせないもので、3次救急をはじめ感染症や大規模災害など我々が担う医療提供は無くすわけにはいかないのです。

これまでの“やりたい医療”より、今後は急性期・慢性期にかかわらず地域の皆様から“求められる医療”を提供することが必要となってくるでしょう。地域の皆様に愛され必要とされる病院であるよう取り組んでまいります。今後ともどうぞよろしく願っています。